

シンポジウム SY4-2

30代の臨床工学技士が考える高気圧酸素治療の未来

寺田直正

独立行政法人 労働者健康安全機構
横浜労災病院 臨床工学部

高気圧酸素治療（HBO）はその特性上、高気圧・高濃度酸素という特殊な環境下に患者を収容するため、安全性への注意が必要であることは言うまでもない。また、多様な適応疾患があり、多方面の知識や経験が必要とされる治療であると考ええる。

HBO 装置操作者（オペレーター）である臨床工学技士は医療機器のスペシャリストであるが、実際の HBO 業務においては装置の管理や操作以外にも患者対応や感染管理、ベッドコントロールなど、HBO に関わる大半の実務を担っている施設も少なくはない。

HBO の安全管理はオペレーターにとって最優先に考えるべきことであり、これまで学術総会などで事故防止や感染対策、耳抜き指導など、安全に治療を実施することに関しては多くの報告がなされ、オペレーターの安全性への意識は向上していると考ええる。しかしながら、安全に HBO を実施することだけがオペレーターの役割であるかといえそうではないと考える。

HBO の安全性は病態を改善する治療のベースラインであり目的ではないため、病態を改善することを目的とし、酸素投与法や治療圧などの 1 治療の内容や、各病態について理解をした上で HBO を行うこと、他治療との連携を考えることもオペレーターの役割ではないかと感じる。また、臨床工学技士は HBO 以外にも様々な業務に携わっており、その中には HBO と関わるものもあるため、幅広い知識を生かしてトータルアプローチが可能になると考える。

HBO 専門医は 460 施設中 136 施設と約 30% の施設にしか在籍していない¹⁾。その中で治療を行うにはオペレーターも治療の内容や各疾患の病態について理解をし、HBO について医師に提案・相談し、総合的に治療へ介入できる存在であることが望ましい。

しかし 2021 年度より、HBO は臨床工学技士養成校での臨床実習必須カリキュラムから外れるなど、臨床工学技士内での立場は低下傾向にあり、臨床工学技士の業務として風前の灯火であると言える。その中で HBO へ携わるにあたり、医師に指示された通りに安全に治療を実施するだけでなく、オペレーターも患者の病態について把握し、自身で考え医師と相談しながら治療を組み立てていくことは、HBO 業務へのやりがいや向上心のアップにも繋がるのでは

ないか。

当院でも一酸化炭素中毒や減圧障害といった緊急治療では、毎治療オペレーターが介入して症状の確認を行い、医師とで協議を行って治療内容を決定している。このような流れがあるのは、オペレーターの先人達が道を切り開いてきた経験があるためと考える。

これまでオペレーターの先人達が道を切り開いてきた HBO であるが、その多くが経験を伝承するといったかたちで各々受け継がれてきているのが現状である。治療内容が価値観や考え方に大きく左右される HBO であるからこそ、過去の症例や経験を伝承だけではなく、多くの人が学べる教育コンテンツ等で提供されると、より統一された HBO の有用性が確立されると考える。

現在でも学会より教育に関わるコンテンツが提供されているが、中には検討中となっているものもある。現在のコンテンツの更新に加えて、ディスカッション形式の講習会・症例検討会や、施設間の治療連携のコンテンツ、各種ガイドライン等が提供されると、非アクティブユーザーを始め多くのオペレーターに重宝されると考える。

【まとめ】

オペレーターにとって治療の安全性は最優先に考えるべき HBO のベースラインであり、これからもアップデートを図っていく必要のある最大の課題であるが、それだけでは治療としての発展はなく現状維持となる。HBO の未来を発展させていくためには、オペレーター自身が HBO の目的である病態の改善についても考え、「やりがい」、「向上心」をもって治療に携わることが大切である。そのためにも、先人達の治療への経験や伝承を「かたち」に残せるような、更なる教育コンテンツの充実、施設間連携などの取り組みが望まれる。

参考文献

- 1) 高気圧酸素治療安全協会：安全協会ニュース 2023；1：pp18-44.